

Codex Amiatinus, Facsimile Edition (アミアティヌス写本ファクシミリ版)

Florence: Le Meta Editore, 2003

アミアティヌス写本は、現存する最古のラテン語訳ウルガタ聖書写本のひとつである。8世紀初頭にイングランド北東部で作成され、旧新約聖書のほぼ全巻を含んでいる。

ウルガタ聖書は、西方教父ヒエロニムス(347頃—420年)によって着手されたラテン語訳聖書であり、それ以前に存在したいくつかの古ラテン語訳を凌いで、後の中世西欧世界で広く用いられた。「ウルガタ vulgata」とは「普及(版)」の意味である。ローマ・カトリック教会は、ようやく16世紀の宗教改革の時代に、ウルガタ聖書を教会の公的聖書と宣言した。その結果、聖書の標準本文を確定する必要性が生じ、そのための底本として教皇クレメンス8世(在位1592—1605年)の下でアミアティヌス写本が採用された。ウルガタ聖書の学問的な校訂作業は、その後も続いている。

アミアティヌス写本そのものは700年頃、ノーサンブリア地方のアングロサクソン王国にあったウェアマス=ジャロウのベネディクト派修道院にて、院長セオルフリス(642頃—716年)の指導の下で、同じものが合計3冊制作された。

そのさい、セオルフリスが修道院創設者ベネディクト・ビスコップ(628頃—690年)とともに、678年にローマから、聖遺物その他とともに持ち帰った聖書写本が利用されたと思われる。その聖書写本が、古代末期のローマの政治家・文人であったカッシオドルス(485頃—585年頃)がかつて南イタリアのウィウァリウムに創設した修道院図書館に所蔵されていたが、後に失われた大型聖書であるグランディオル写本であったと推定されている。

おそらくグランディオル写本に倣い、アミアティヌス写本の形態は、高さ49cm、幅34cm、厚さ18mm、重量34kgの一冊ものの大型版聖書であり、1040枚の羊皮紙頁からなり、そのうち1029頁に文字ないし挿絵装飾が施されている。3冊のうちそれぞれ1冊は、ウェアマスとジャロウの2つの修道院教会に収められた。

716年、院長セオルフリスは時のローマ教皇グレゴリウス2世(在位715—731年)に献呈するために、残る一冊の最も美しい写本を携えてローマに旅立ったが、途上のブルゴーニュ地方ラングルの地で没した。その後9世紀になって、イタリアのトスカナ地方のアミアータ山にあるサン・サルヴァトーレ修道院に、本写本が保管されていることが知られるに至った。「アミアティヌス」という名称は、この山名にちなむ。また19世紀には、サン・サルヴァトーレ修道院宛ての献呈辞が後代の書き換えであることも判明した。ともあれ千年以上に亘って当地で保管された後、本写本は1786年、イタリアのフィレンツェにあるメディチ・ラウレンツィアーナ図書館に移され、現在に至る(保管番号MS Amiatinus 1)。

聖書本文と並んで、本写本の装飾文様や挿絵が美術史的に重要である。装飾文様は上記のグランディオル写本に遡るとされ、例えば書記エズラの肖像(fol. 5r)も、当時のイギリス諸島部で盛んであったヒベルノ・サクソン美術(いわゆるインスラ美術)よりも、むしろ古代末期の地中海世界の様式に近い。その特徴は、近隣のリンディスファーン島の修道院で制作された『リンディスファーン福音書』(おそらく715—720年に制作)における、福音書記者たちの肖像の構図や服装に影響を与えた。

このようにアミアティヌス写本は、聖書を介した西欧南北の豊かな文化交流の証言なのである。